

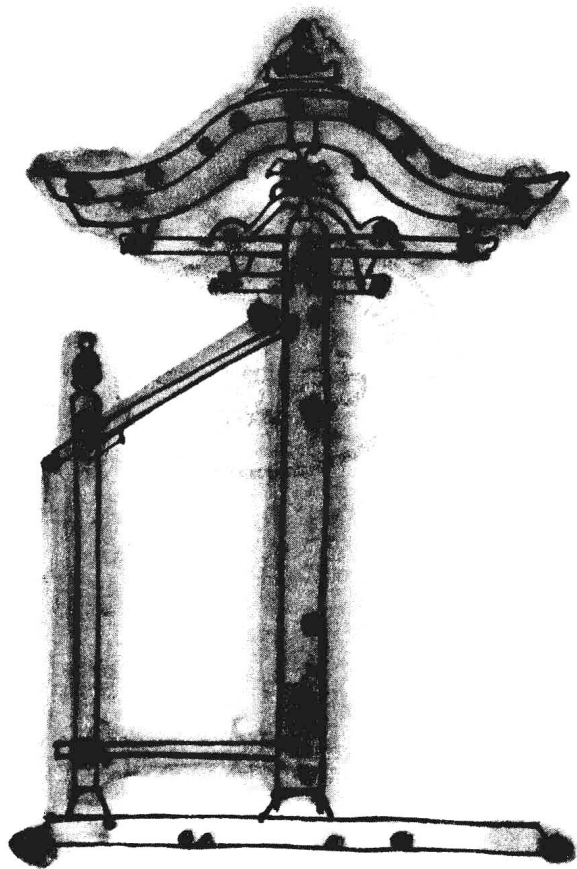
命を売る武士

南 條 範 夫



命を売る武士

南 條 範 夫



新潮社版

武士を売る命

昭和三十三年六月十五日 発行
昭和三十三年七月十五日 二刷

定価二二〇円
地方売価二四〇円

著者 南条 範 夫

発行者 佐藤 亮 一

東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表七一二―九
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へ致します。

目次

命を売る武士	五
大江戸の空の下	三
おらんだ鏡	六
閨房禁令	二六
鉄砲商人	一四
地獄城	一七一
戦国無惨	二〇五
室町絵巻	三九

裝
幀

御

正

伸

命を売る武士

命を売る武士

一

寺門静軒の「江戸繁昌記」が、風俗壞乱の故を以て、版木焼捨を命ぜられたのは、天保八年である。

天保十三年、静軒は、更に、幕府の忌諱に触れて、府内退去、武家奉公構い、を申渡された。これは、同年、ひそかに刊行した「非命慨言」が、たまたま幕吏の眼にとまった為であると言われている。

静軒は、一応、江戸を立去って新潟に赴いたらしいが、間もなく再び江戸に潜入した。恐らく北陸の小都市では衣食の途を立てかねたものであろう。

この天保十三年版の「非命慨言」は、伝えられる処によれば、極めて奇矯な言辞を列ねたもので、当時の官憲がこれを容認し得なかったのは、当然であると思われるが、「非命慨言」の名で発表されたものは、実の処、三種類あった。これ以前、天保九年及び十一年に刊行された分は、幸いに、当局の目を脱れ得たものらしい。

尤も、同じ題名を持ちながら、この一年おきに秘密出版された三書は、それぞれ、全く別の内容をもつ著書であった。

三著に共通しているのは、ただ、その何れもが、人間の生命を論じていると言う点だけであ

る。

第一の著は、恐ろしくニヒリスティックな筆致で、この世の一切を罵倒し、殊に自分自身を手ひどく嘲笑し、人生は畢竟生くるに値せず、と論じている。静軒の世を嘲り、己れを罵る筆癖は、既に「江戸繁昌記」にも顕著であった。これは、有能の才をもちながら全く時世に容れられなかった彼の、終生捨て得なかったところであるが、本書に於ては、前年の「江戸繁昌記」刊行禁止直後の為か、殊に甚しく、繁昌記にみられたユーモアもペーソスも全くみられない。単刀直入に、こんな下らない世には生れぬ奴が最も賢明、不幸にして生れたらば一日も早く死ぬ奴が次に賢明、生れて永生ぎする奴は愚の骨頂、と言い切っているのである。

同名の第二の著書は、前の著書につづいて、人間はなるべく早く死ぬがよし、天命つきぬならば、自殺するがよい、として、自殺の方法を、男女、年齢、身分の各種に応じて卅二通りに亘って、懇切に説明してあると言う。

これだけでも、相当桁外れの著書であるが、更に、奇妙なことは、その末尾に、一言これ程人命を蔑視している静軒が、同じ死ぬならば、ただで死んではつまらぬ、なるべく高く、己れの命を売れ、と述べていることである。

何気ない風に、ちよっと付け加えたようにみえるこの不可解な言が、具体的に何を意味したのかを、示したものが、第三の著書であった。

惜しむらくはこの第三の著書は、その殆どが没収され焼却された為、現存するものなく、内容の詳細は不明である。わずかに「武江夜話」の著者の伝えるところによれば、人はその生を終る前に、必らず、この世に害毒を流しつつある奸物の一人を殺すべし、と言う意味の恐るべきテロ

リズムを開陳したものであったと思われる。

以上の三著書は、世を白眼視した当時の静軒の異常とも言うべきほど歪められた思想を示すものであるが、さてこのような思想を抱いた静軒が追放された江戸に戻って、どのような生活をしていたか、と言う点になると、殆ど全く解らない。

相当きわどい仕事をしていたことは推測される。或は、幕府の反水野派の某々が、些少せうしょうの金で買収して、反水野宣伝文書を作らせていた、とも言われるが、確たる証拠はないのである。

ただ、確実だと思われるものは、静軒のかつての弟子石岡英太郎が著した「武江夜話」に記載されている事柄のみであり、われわれは、これによって、当時の静軒の生活の一端を窺うかがう他はないのである。

石岡英太郎は、幕府の御家人藤村作之進の嫡男ちやくなんである。廿歳の時、惣領除そうりょうのぞきをされて、母方の姓に戻って、石岡姓を名乗った。その理由は、後に述べる。

英太郎が静軒の門下生となっていたのは、天保七年頃で、「江戸繁昌記」五篇が続々刊行されて洛陽の紙価を高からしめていた、いわば静軒の全盛期である。一年足らずの短期間ではあり、静軒の性格からみて、弟子を大して愛撫したとは思われない。

にも拘らず、英太郎が、静軒に対して一種の愛情をもち、これに感謝の意さえ捧げているのは、天保十四年の秋、思わぬ事情によって、彼が、静軒と、数日の間起居を共にする運命をもったからであろう。

英太郎が「武江夜話」を著したのは、この時から廿年を経た明治三年六月である。恐らく、その前々年、静軒が歿ぼつしたことを知って、せめてもの追憶の意味で、自分が静軒の下で遭遇した事

件を記す気になったものであろう。

英太郎は、この著書の中で、自分が今日無事に生を保って、新政府に勤務しているのは、ひとえに静軒先生、或は同先生のさし向けられた某少年のためである、もしそうでなかったならば、自分は、天保十四年九月某日、茗溪堤上、秋草を血に染めて、自刃していたに違いない、と述べているのである。

二

石岡英太郎が、天保十四年、自ら生命を絶とうと決心したのは、しかし、決して、静軒の著「非命慨言」に示唆された為ではない。彼はその時、そのような著書が存在さえ知らなかった。

彼が自殺を決意したのは、ただ何となく、生きてるのが、厭になったからである。尤も、理由がなかった訳ではない。——いや、理由は、あり過ぎる位あった。

貧乏で喰って行くのがむずかしくなったこと、将来の見込みも無くなったこと、武家の惣領と生れながら家を出なければならなかったこと、惚れた女を人にとられてしまったこと、思いがけなく親しい友を斬ってしまったこと——これらの原因が、ごちゃごちゃになって、何となく生きていく気がしなくなったのである。

その上、悪いことに、この天保十四年と言う年は、十二年以来の水野忠邦の峻厳な改革令のため、経済界は不況のドン底に沈み、人心頗る自棄的になって、自殺者が相次いであらわれた。自殺を奨励する宗旨の、いかがわしい「死なう教」とか言うインチキ宗教さえ、雑司ヶ谷の辺にあらわれて、かなりの信者を集めていると言う噂さえあった。

言ってみれば、自殺は、天下の流行であった。毎日のように、武士や、町人や、老人や、娘が、自ら腹を割いたり、毒を呷い^おたり、首をくくったり、身投げしたりした。

多感な廿五歳の青年石岡英太郎が、上に述べたような心境にあった時、この流行に、不可抗の魅力を感じたとしても、あながち不思議はないであろう。

英太郎といえども、初めから、ベシミスティックな性格であった訳ではない。十八九迄の彼は、卅俵三人扶持の下級家人の忤^ことして、ろくに米の飯もくえぬような境遇に成長しながらも、昂然^{かうぜん}たる青春の霸氣^{はき}は、一応もっていたのである。

父の作之進と共に、傘張りの内職に、指先のしびれる程精出し、そうして獲たわずかの金を束修^{しゅう}として、番町の糸崎鳩堂^{きさきとう}の門に通って、熱心に勉強した。

同門で、最も仲のよいのが、秋月藩士川添重兵衛の二男礼次郎と、日本橋の呉服屋丸糸のあととり吉之助である。礼次郎は次男坊だが、兄が病弱なので、いづれ父の跡をついで、江戸藩邸の内証用人となる筈^{はず}、吉之助は町人の身分でありながら、学問が好きで、特に願って鳩堂の門下に加えてもらったものである。

この三人、何故か気が合って、よく一緒に議論し、それぞれの境遇と性格とに応じた若々しい未来の空想に花をさかせた。

「私の家はひどい貧乏暮しだ、一家揃って内職しているが、毎月、借金がふえる許り。だが、悲観してはいない。必らずこの境遇から抜け出してみせる。能力さえあれば——あの三橋伝五右衛門殿を見給え、十石五人扶持^{ぶち}の身からのし上って、一千石の御徒頭^{おちがしら}だ。とてもあそこ迄はゆけないとしても、何とかして百石どりの身分にはなってみせる。今の本丸御老中水野忠邦殿は、拔群

の才幹をもって幕政の改革を企図しておられると言う。忠邦殿が本当に政治の中心になれる日は必らず近い将来にくる。林肥後や美濃部筑前や中野碩翁なぞと言う奸臣たちがしりぞけられて、人材が自由に登用される日が来たら——」

当時まだ藤村姓を名乗っていた、一番年若の英太郎がそう言えば、二つ年上の川添礼次郎も、「そうだ、拙者も水野越前殿に期待している。幕府の頹廢はひいて諸侯各藩の政治に及んで、もう収拾し難いほどの腐敗ぶりだ。我藩の恥を言うようだが、江戸留守居役なぞの乱行ぶりは目を蔽うほどだ。怠惰と傲慢、女と酒、ほかには何も無い。一から十まで賄賂、阿諛、閥閥、役得——事毎に腹の立つこと許りだ。あんなことを、いつ迄も許してはおけない。拙者は父の跡をついたら、断然、同志を糾合して、藩政の改革をやってみせるぞ」

と、憤慨する。吉之助も負けてはおらず、

「町人と言え、金儲けのほかに何一つ頭がないように思われていますがね、私は違いますよ、丸糸の店が私の代になったら、現在のような怪しからぬ買占めや、贅沢品ばかり精出して作っているのをやめて、廉い、よい品を、誰の手にも入るようにしてみせます。越後屋なぞにばかり勝手なまねはさせておきませんよ。越前守さまは、かねてから、問屋仲間が勝手なとりきめをして、利益をむさぼっているのを、ひどく憎んでいらつしやると言うことですからね、きつと、株仲間にかかきびしい手をおうちになるに違いない。その時は、みていて下さい、私だつて——ははは、まあ、今の処は、一生懸命、商売の方法を勉強して、その日にそなえています」と見得を切るのである。

だが、三人とも、こうして口に出して言う将来の希望の他に、胸に秘めた、同じ、楽しい夢を

もっていたのである。

その夢の女主人公は同じように、十六歳になった鳩堂の娘、お露であった。

お露は、誰の眼にも、美しい顔立をしていたし、氣だての優しい娘であつたから、おそくに思ひをよせていたものは、彼ら三人ばかりではなかつたであらう。

とうとう、或日、一番年長の吉之助が言った。

「おやじが、早く嫁を迎えろと、うるさく言うので、身を固めたいと思っています。おやじは、同業のものの娘を望んでいるらしいのですが、私は、芝居や遊芸にうつつをぬかしているに違ひないそんな家の娘よりも、もっと、落付いた、しっかりした、そうして、やさしく美しいひとを貰うつもりです」

英太郎も礼次郎も、それを聞いて、どきりとし、頬の筋肉をこわばらせた。——お露さんのようない——と、吉之助が、口には出さないが、はっきり言つたような気がしたからである。そして、お露の婿として、吉之助が、年齢の上でも、財力の上でも、三人の中では、最も有力な資格を具えていたからである。

三

吉之助が重大な発言をして数日後のこと、湯島天神に近い同朋町の一角にあるひっそりした出合茶屋のはなれで、英太郎とお露とがびったり寄りそつて話していた。

「お露さん、そなた近い中に、物持ちの商家の嫁になるのであらう」と英太郎が、少々、とがった声で言う。

「まあ、何と言われます。わたしは町人の嫁などにはなりませんね」

「いや、そうでない。この頃の武士は皆、ひよろひよろ慮とらのように貧乏だ。お露さんはきつと、お大尽の女房になって、よい着物をきたいのだろう。上着は風色のお召縮緬ちぢみに、黒い唐襦子とうじゆすの裾廻しすそまわし、下着は半四郎鹿の子、帯は広幅の呉絹ごぎゆう。緋縮緬ひぢみの長襦袢じゆばんに、白綸子よりんすの半襟はんえりが、落し眉おとしまゆとそめた齒はに、ずいぶんとよくうつると思つてゐるだろう。根掛けには珊瑚さんご。櫛くしは銀とべっこうの細工物、縮緬の手柄てがらを掛けて、長火鉢ながひばちの前に坐れば、さぞ美しい女房ぶりだと思つてゐるのだろう」

「まあ、何のことやらさっぱり分りませぬ。それより英太郎さま、そのような女子おなごの衣裳髪かたちの事なぞ、よく知つておられます。どこで見られたやら、妙なこと」

「なに、お露さんがどのようなみなりをしたくて商家の女房になるのかと、一生懸命に調べてみたのだ。三馬だの春水だの読んでみたが、よく分らぬ。でも大体はこんなことなのだろう。そして、堺町、葺屋町の芝居茶屋を、しゃなりしゃなりと歩き廻まわつて、菊之丞きくのすけとやら、杜若とじやくとやら言うやくたいたいもない役者に、うつつをぬかすのであらう」

「うちもない、菊之丞はもう亡くなりました。杜若は——英太郎さまに似ております」

「えい、それはまずい、武士が役者風情に似るとは。では、舟遊び、遊山とゆこう。屋形船に打ちのつて本所の羅漢、亀戸の天神へ、昼日中から、酒肴しやくがくひろげて賑やかにくり込みたいか。上野のお山に幔幕張まんくさばつて花むしろ敷き、浄瑠璃、三味線、鼓、太鼓、笛、踊り、息のあるほど浮かれたいか。これは人情本で読んだのではない。この眼で去年しかとみた」

「英太郎さま、今日はどうなさったのでございます。先程から妙なことで許り。わたしが、なぜ、

芝居茶屋を走り廻ったり、上野のお山で浮かれたりせねばなりません。」

「それならば言おう、お露さん、こなた、吉之助の嫁になるのであらうが？」

「吉之助どのの嫁に？　誰が、誰がそのようなことを申しました」

「吉之助が、お露さんを嫁に——いや、お露さんとは、はっきり言わなんだが、嫁を貰うと言っていた。お露さんに決まっているのだ。あいつ、鳩堂先生に申入れたに違いない」

「わたくしは、何も聞いておりませぬ」

「聞いたら、何とする」

「おことわりするまでのこと」

「本当か、お露さん、本当か」

「本当でなくて、ここへは参りませぬ」

「うん、そうだ、そうだ、それはそうだ。だが、鳩堂先生はお金が——いや、商家が余りお嫌いではないらしい、もし先生から、すすめられても、きつと厭と言ってくれるか、お露さん」

「きつと、厭と言います」

「きつと、厭と言ってくれ。いくら金があっても、商家の嫁なぞになってロクなことではない。大事にしてくれるのは半歳——いや三月、ひょっとしたら一月ぐらいかも知れぬ。商家の若旦那と言うものは、皆、浮気遊びをするものだ。遊びが本業だと言ってもよい位だ。吉之助だとて、すぐに上田の小袖に竜文りゆうもんの合着、黒手八丈の下着に浅黄縮緬、黒七子の半襟でもかかった襦袢じゆばんきて、花色こはくの帯を猫じゃらしに結び、金唐革のりゅうきん金物の前提さきげに、文魚形ぶんぎょがたの鼻紙袋でももって、ちゃっちゃと吉原通いをやり出すに決まっている。いやいや、吉之助の奴なら、神明

町や深川あたりかも知れぬ。貸本にはそう書いてあった。お露さんのことなど抛¹¹ったらかして、悪所通いにうつつを抜かし、魂をぬかれて女に口説かれて受出し、大方どこかの横町に猫と一緒に囲うであらう、家へなぞ戻ってこぬ」

「まあ、いやらしいこと」

「いやらしい、本当にいやらしい。あいつが、金屏風に長襦袢のかけてある下で、箱火鉢の前に坐って、長煙管でもくわえて、おしろいくさい匂いにとろけている間、お露さんは、夜食もせず、におろおろして待っていなけりゃならないのだ」

「まあ、いやなこと」

「いやなことだ、瘦^やせてしまうぞ、この小さな手も、ふっくらした頬も、色が青くなって、頬がこけて、——どうしよう、そんなことになったら。お露さん、いってはいけないぞ、吉之助のところなぞ。いや、誰のところへでもだ、いってはいけない」

「どこへもゆきませぬ、英太郎さま」

「そうだ、縮緬^{ちりめん}だって繻子^{すずこ}だって、更紗^{さら紗}だって、金襴^{きんらん}緞子^{どんす}だって、この英太郎が買ってあげる、お露さん、今、すぐには買えないが、その中きつと買って上げる、そんなものに目をくれないでくれ」

「わたしは、そんなもの欲しくありません」

「欲しくてもいい、買ってあげる、うんと買って上げたいのだ、だから、お露さん」

「ええ」

「きつと、この英太郎のお嫁さんになるのだ」